

訣 秘 の 心

特 225

277

著 吉 貞 邊 河

行 發 社 界 世 曜 日



始



時 225
277

河邊貞吉著



の
秘
訣

日曜世界社出版



「われ福音を宣傳ると雖も誇るべき所なし已を得ざるなり、若
 われ福音を宣傳へずば實に禍なり」(コリント前書九の十六)
 神の熱心をもつて愛し、且その救はれんことを恒に祈りつゝ
 ある我が八千萬の魂のためにこの小著をさゝぐ

昭和五年十月

河邊 貞吉

目 次

一、眞の安心(一)……………(一)
 二、眞の安心(二)……………(二三)
 三、眞の利益……………(二二)
 四、眞の幸福……………(三三)
 五、眞の救……………(四二)
 六、人生の緊急問題……………(五八)
 七、新 生 命……………(六九)
 八、今は恩恵の時……………(七六)
 九、信仰に育つ道……………(八六)

『イエス彼等に曰けるは、偏く世界を廻りて凡ての人に福音を宣傳へよ』(マルコ傳十六の十五)
『而して我等は常に祈ることと道を傳ることを務むべし』(使徒行傳六の四)

安心の秘訣

河邊 貞吉 著

眞の安心 (その一)

われ平安を汝らに遺す、わが平安を汝らに與ふ、わが與ふるは世の與ふる如くならず、汝ら心を騒がすな、また懼るな。(ヨハネ傳十四の廿七)

なぜ、かう心配苦勞の絶え間がないのか。何とか安心して暮りたいものだ。安心な世渡り、これは誰もが求めてゐるものであるが、さて、その割合に、これならばといふ安心を握つてゐる人は尠いのである。

それでは、安心といふものは容易く握れないものかといふと、決して、さうではな
い。誰でも、きつと握れる。握れないといふのは、つまり握らうとしないからか、或
は握らうとする安心といふもの、正體を突きとめてゐないからではあるまいか。

二種の安心

そこで先づ考へられることは、安心にも二種あるといふ事だ。即ち最初に掲げたキ
リストの言葉の中にあるキリストが與へて下さる「わが平安(安心)」と「世の與へる平
安(安心)」である。

世の與へる安心

それでは世の與へる安心とは如何なものか。これは、その人の境遇事情によつて種
々雑多であるが、要するに外部から來る所のものである。現世の樂によつて心の慰安

を得やうとする人、無論潔い、高尚な、深はまりのせぬ娛樂は、人間の生活にある程
度までは必要である。けれども充されない心を抱いて、今日は芝居、明日はキネマと
漁り歩くのは如何であらうか。成る程其處には人情があり、戀愛があり、諧謔があつ
て、或は頤を解かせ、或は涙に袖をしぼらせて、兎も角も、それに親んでゐる間だけ
は、苦痛も不安も凡てを忘れさせるであらう。しかし、さうした状態が何時まで續く
ものか、それらの場所を離れてしまへばそれつきり、元のもくあみ、寂しさ、物足り
なさは相も變らず、ひし／＼と我が胸に押し迫つて來る。

その他、流行を逐ふ事に、小説の耽讀に、旅行に、魚釣りに、飲酒に、玉突に、麻
雀にと、それ／＼利那の快を求めるけれども、それも、すべては一時の氣まぎらかしに
過ぎないで、所詮、心の奥底には、それらの刺戟だけでは、どうしても醫す事のでき
ない寂寞、苦痛がこびりついてゐる。

嘗てフランスの或知名の醫師の許へ、一人の憂鬱患者が診察を乞うて來た。彼は、

いつも、その心に喜が無く、張合がなく、苦痛と、煩悶と、懊惱の日を送つてゐたが、どうかして此の堪へられない、あぢきない世渡りから免れたいと、あらゆる醫師にかゝつても見、有ゆる薬餌に親んでも見たが、少しの効果も無いので、勧める人のあるがまゝに、はるくパリまで出向いたのであつた。

醫師は彼に世界旅行をすゝめた。然し彼は既に世界を三たび旅行したとの事であつた。やがて醫師は一大発見でもしたやうに、

「さうさう、英國のロンドンには、チャールス、マチユースといふ世界一の道化役者がある、彼の所作には奇想天外の可笑味があつて、どんな者でも、それを見ては抱腹絶倒せぬ者はない。君よ、先づそこへ行き給へ、君のその憂鬱は、きつと吹き飛ばされる事請合である」

と言つた。それをきいて憂鬱患者はモチ／＼しながら

「何をお隠し申しませう、私とそのチャールス・マチユースなんです」

と答へたとの事である。

この世の興へる喜びや安心は大い、かやうなものである。

或人は、また安心は、凡て「金」によつて得られると思つてゐる。即ち生活の安定も、家庭の平和も、自分の心の平安も凡ては金によつて解決が出来ると思つてゐる。

然し事實はどうであらうか。富める人にも、貧しい人の知らぬ心配があり。苦勞がある。富ゆゑにその生命を脅やかされる事は決して珍しい事ではない。取引銀行が破産しないであらうか、株券がどうかかなりはすまいか、貸家に火災が起らねばよいかと、數へて見るなら、限りない心配に満たされてゐる。

金で安心が得られるものならば、百萬長者や千萬長者の家庭に悲劇は行はれまい。私の知つてゐる、ある看護婦が、ある資産家の夫人を看護するため派遣されたが、餘りにも空虚な、そして悲惨な家庭の内幕を見せられて、富に對するあこがれを、すつかり抛棄してしまつたと、しみ／＼語つてゐた。

此世の興へる幸福を以てするならば、昔のソロモンこそ、その代表者ともいへるであらう。彼は権力ある國王であり、大智者であつた。のみならず彼の富は空前絶後ともいへる位で、「銀も石ころの如く」見なされてゐたのである。かくも贅を盡し美を極めた豪華な生活、後にイエスが「ソロモンの榮華」と仰せられた程の生活、それによつて、ソロモンは果して安心を握つてゐたであらうか。ソロモン王の晩年の述懐は、その真相を曝露してゐる。

「空の空なる哉、すべて空なり」

これが榮華を極めた大王の唇から洩れた言であるかと思つと、彼の生涯も亦寔に惨め極まるものであつたことが想像される。同時に後の世まで「智も富も、人間の生活を眞に幸福にしない」といふ一大教訓をのこしてくれたのである。

それでは何故、それらの「物質」が人の心に満足を與へないのであらうか。理由は明白である。即ち人間は「物質」のみでは生活のできないものに造られてゐるからで

ある。若し人間が「物質」のみで生活ができるものなら、飲んで食つて、ある種の慾望を満足させさへするならば、それで充分であらう。恰度、犬が魚の骨で満足し、豚が豆がらで安んじてゐるのと同じやうに。

然しながら人間の衷には神に肖た靈性が興へられてゐる。他の動物にはこれがない。神を敬ふ心、永遠を思ふ心、それは人間のみに興へられたものである。人が動物の靈長であるといふ理由はこゝにあるのである。然るに遙か、それ以下の物質を以て満足させやうとするのは甚しい矛盾であり、自己僞瞞である。安心の無いのは當然である。

イエスの興へる安心

然るに、もう一つの安心、即ち神がキリストによつて興へる「わが平安」がある。キリスト自らが「わが平安」と仰せられたのは、いふまでもなくキリストの衷にある

所の平安、安心である。

そこで考へることは、一たい、キリストとはどんな方か。キリストは神の御獨子である。といつてキリストが靈體で、しかも遙か天上から下界を見下して居給ふといふだけならば、それが神の子であらうと、何であらうと、我らとはとんと縁の遠いものである。けれども、神の御獨子であるキリストは、人間として、この世に生れたのである。然も王侯貴人、富豪、祭司の長の家を生れ給はずして、一労働者の家庭に生れたのである。そして波風荒いこの世を我らと同様に飢ゑ、渴き、疲れ、「狐は穴あり空の鳥は巢あり、されど人の子は枕する所なし」と自らいはれた通りの生活をなされたのである。そればかりか當時の人々に誤解され、曲解され、迫害され、遂には十字架上に無惨な磔刑にされてその地上の一生を終られたのである。この比ぶべくもない、波瀾重疊、迂餘曲折の御一生の中にも、常にキリストの中に大盤石の如く動ぜざるものがあつた。それは何であらう。それこそ、キリスト自らが握つて居られた「平

安」即ち安心であつた。キリストはその安心を「汝に與へる」と仰せられる。しかも、さう宣言されたのが十字架にかけられ給ふ前夜であつたことを思ふ時、その安心は十字架の死さへも、これを揺がすことのできなかつたことを知ることができるのである。何といふ驚嘆すべき安心ではないか。

なほ新約聖書の中に録されてゐるキリスト一代記のいくさりに次のやうな物語がある。

或日、キリストは、カペナウムの港から弟子たちと共に小船に乗つてガリラヤの湖を横切り對岸の淋しいところへ出向かれることになつた。その途中の出来ごとである。小船が湖の真中に出た頃、その邊特有の俄の颶風、巻き起る狂瀾怒濤、船は忽ち浸水、難破沈没は目前に迫つた。以前この湖で漁を業にしてゐた腕に覺えのある弟子たちも、何の施す術もない。キリストはと見れば、艫の方に茵を枕に眠つていらつしやる。この様子に弟子たちは轉がるやうにキリストの傍に駆け集つて口々に叫

んだ。

「先生!! 我々の生命が危いのを打ちやつておかれるのですか」

その聲にキリストは半眼に弟子たちの顔をながめながら従容自若として起き上り、
いとも莊重に宣告された。

「風よ黙せよ、波よ静かなれよ」

たゞ一言! 不思議や、吹きすさぶ颯風はさつと止み、荒れ狂ふ波も、そのまゝ治ま
つて、もとの大風となり、小船は安全に目的の對岸に到着したといふのである。

「怒濤の中の安眠」これはキリスト御一生の縮圖といはうか、實にキリストの握つて
居られた安心がたゞのものでないことがわかるのである。

殊にキリストが、その御最期に、自分を十字架の極刑にする惡人原のために、天の
父なる神さまに

「父よ、何卒、我を十字架にかける前後をわきまへぬ者共の罪業を許し給へ」

と、おとりなしをなされる、その餘裕綽々たる平安に至つては、到底文字や言葉で現
し得ないものではなからうか。

そこで私は、これを眞の安心といふのである。順境の時、得意の時、波風立た
ぬ上天氣の日には、誰も喜んで生活もしやう。しかし、この世の航海も上天氣ばか
りつゞきはせぬ、失業もすれば、貧乏のどん底にも落ち込む時もある、誤解もされ
る、病氣にもとりつかれる、思はぬ災難にも出くはす。しかし如何やうな失意、逆境
の逆捲く怒濤にも、四面楚歌、敵の重圍に陥らうとも、びくともしない大盤石の安心
この眞の安心こそは、誰もが何とかして握りたいと求めてゐるところのもの
であるまいか。否我らが握りたいと求めてゐるばかりではない、我らの求めてゐる以
上に、天の父なる神が、我らに是非とも握らせたいとねがつていらつしやるのである。
こゝに人間の要求と天の父なる神の供給とが、びつたりと合致するわけである。が、
さて、それが人ごとでなしに、如何すればわがものにできるか、これが先づ、こゝに

至つて考へられる重要な問題である。眞の安心を握る秘訣——次に詳しく話すことにせう。

眞の安心 (その二)

イエス言給ふ 我は道なり (ヨハネ傳十四の六)

眞の安心のない理由

眞の安心の正體は前回でほど了解されたと思ふが、それでは、その眞の安心を我がものにする工夫があるか。以下如何すれば、眞の安心がわがものにできるか、つまり眞の安心獲得の秘訣を話さう。

私は今それを話す前に、何故我々に安心が無いのかといふ、其原因に就いて先づ考へて見たいと思ふ。

或宗教家は「どうせ此世は苦の娑婆だ、三界火宅だ、そこで安心を得やうと望むのが間違つてゐる、それが心の迷だ、苦むのが當然であり、悩むのが必然の運命だ、何

もかも前生の約束と諦めて後生を願へ」と教へる。

成る程、現代の社會を見れば苦しい事、悲しい事、痛ましい事、惱ましい事は餘りに多すぎる。だからといつて、かうあるのが人間の運命であるとするならば「萬物の靈長」などと言つて何處に誇る所があるか。若さうならば、人間として生れた事は神の祝福でなくして、寧ろ咀ではないか。さすれば人は誕生を祝ふ代りに、誕生を弔はねばなるまい、否反つて本能のままに生き動き死ぬる禽獸の方が遙かに幸福だと言ふことができる。しかし我らはそれに賛成ができるか。否、人間は、たとへ、どんなに墮落しても、その心が腐つてゐても、禽獸になることは出来はせぬ。人間の衷には、微かながらも良心がある。

然らば安心の無い原因は何か。神はそれについて仰せられる。

『悪しき者には平安なし』

と。つまり安心の無いのは、人間が「悪しき者」だからである。人間は皆、神の前に

罪人なるが故である。

と、いつて、最初からさうであつたわけではない。人間が罪人になつたのは神から與へられた自由意志を亂用して、神の誠を破つたことから、神さまと親子の縁が断れてしまつたのである。一言の嘘は眞實でいます神さまから、我らを引離した。人を憎み恨んだ罪は愛の神から我らを遠ざけた。不淨不潔な思念を心に描いただけで聖い神と絶縁してしまつた。かくして人間は一切の生命の本源、幸福の本源、愛の本源である神を見失つて憐むべき迷兒となり終うせたのである。

憐れな迷兒！しかし人間は、それで到底堪へ得られるものでない。親に會ひたい、親に歸りたい、ところが親がわからない。わかつてゐても罪の雲霧で親の顔がはつきりが見えない。そこで「溺れるものは藁でもつかむ」といふ譬の通り、神を離れて迷兒になつたたましいは、頼にもならぬ者に頼らうとしてもがいてゐる。人を造つた神を離れて人が造つた偶像に頼る。財産や名譽や地位や、限りある人の力や智慧に頼

らうとする。それは神を離れた哀れな迷兒の姿である。神を離れた人間に安心がなく安心のない原因が罪であり、罪は外部のものでなくして我らの内にある事が明かとなつた。

眞の安心への道

斯く不安心の原因が判りさへすれば、そこに眞の安心を握る工夫は語らずとも明かになつたわけである。外に六つかしい秘訣がある譯ではない、迷兒は親の懐へ歸りさへすれば安心する。菓子や玩具をどれ程與へても、それは一時の氣休めで、暫くはまぎれてもゐやうが續いて襲うてくる不安は如何する事も出來ぬ。同じ様に父なる神から離れて迷兒となつてゐる人間に、富や名譽や快樂を與へたところで、それは一時的の氣やすめ藥、所詮は神の温い懐へ歸らなければ眞の満足、眞の喜は得られない。それならば如何すれば神の懐へ歸る事が出来るか、これが、こゝで考へられ

る大切な問題である。

迷兒と言へば何だか神から遠い様にも思はれるが道は決して遠くない。否、最も近い。神は宇宙に満ちていらつしやる。たゞ罪のために眼を掩はれてゐるから、ハッキリと認められないだけである。勿論神を「創造主」であると頭腦で理解したからといって、神の存在を合點したからといって、所謂「有神論者」になつたからといって、それだけでは眞の安心が握られるわけではない。心の眞底から神に對して「天の父よ」と呼びかけ、其懐に抱かれるのでなければ、眞の安心は我がものにはならないのである。

氷炭相容れず

しかし神は餘りに聖く、人は餘りに穢れてゐる。水と油は一つにならぬ。聖い神と汚穢た自分とが果して一つになれるだらうか。それには先づ罪を除かねばならぬ。とい

つて、その罪は難行苦行で除かれぬ、慈善事業を積んでも同様だ。所謂「罪亡ぼし」は罪を失くしてはくれぬ。安心の握れない原因が判つた。安心を握れる道も判つた。が、さて神に歸らうとしても、神と人との間を邪魔する所の罪の故に、人は神に近づく事さへ出来ぬ。所詮は絶望の外無いものか。

唯一つの道

こゝに喜の音づれば、神の子イエス・キリストによつて宣言される。

「我は道なり」

と。神と人との交りが絶え、神に歸る道が塞がり、人は絶望の淵に沈まうとする時、この言は如何に大いなる喜であり、力であり、また慰ではあるまいか。

昔から聖人、君子、英雄、豪傑、名僧智識の中には「道」に就いて講釋をしてくれた人はいくらもある。しかし道の講釋でなく、我れ自らが「道」となつたものが何

處にあらう。この河をどうして渡れるかと問はれて、橋で、船で渡れるとは誰でもいへる。しかし誰がその橋となり船となるか。キリストは道の講釋でない、人間と神との間に御自身が橋となり船となられたのである。

かういつてしまへば極めて事は簡単である。けれども、そこには實に驚くべき犠牲が拂はれ、生命が賭けられてゐる。

キリストは所謂聖人君子ではない。キリストは天地萬有の創造主、その主宰者なる神の御獨子である。キリストの御一生には一點の罪の曇もない。純の純、聖の聖とはキリストの姿である。然るに十字架の上に尊い生命を捨て給うたといふことは、神と我等の間を遮断してゐる罪を打ち碎いて、我らが何の手柄もなしに、神の許へ通ずる道とおなり下されるためである。誰か、この驚くべき神の愛に感激せないうで居られやうか。

キリストの十字架によつて神への通路は開かれた。罪の重荷は下された。神は神に

來らんとするものを歓迎せんと待つて居られる。

終日泣き暮した迷兒が再び親の懷に抱かれた時、その喜や如何ばかり、最早何の心配、苦勞、悲み、嘆きもない。たゞ、あるものは眞の平安のみである。

皆さまよ、あなたの過去二十年或は三十年、五十年の長い迷兒の生活から、今こそ方向轉換、踵を返して、この唯一つの道により、あなたの靈魂の父なる神に立ち歸りこの眞の平安、大盤石の安心を獲得されるやうに、私は皆さまに切に望んで止まないのである。

眞の利益

かみちやま 神を敬ひて足る事を知るは大なる利なり (テモテ前書六の六、元譯)
されど足る事を知りて敬虔を守る者は大なる利益なり (同上 改譯)

何が利益か

「儲かりますか」「何かぼろいことはありませんか」といふのは大阪商人普通の挨拶である。子供の遊びごとにまで損得を露骨に言ひ合ふ。

損はしたくない、何とかして得をしたい、儲けたい、利益を得たい。百人寄れば百人、千人寄れば千人、誰ものがひは、みな同じである。それは何も悪いことではない。正当な手段で相當の利益を得るといふこと、殊にそれを國家社會のために有益に使用して行くといふことは寧ろ獎勵すべきことである。しかし、自己の利益を得るためには手段も方法も撰ばない。對手が泣かうが、苦まうが、平太張らうが、そんなこと

には一向おかまひなし、さうして得た利益で、たゞ自己の慾望を満足させさへすればよいといふのは如何なものであらうか。

さうした人は一にも金、二にも金、地位が何んだ、名譽が何んだ、金さへあれば地位も名譽も買へるでないか、金殿玉樓にも住めるでないか。美衣美食、榮耀榮華は思ひのまゝ、さても有りがたいは金! 金!! 拜金宗とは、かういふ手合のお宗旨である。しかし、考へねばならないことは、それが果して眞の利益か。なる程、金力、財力の前には地位も名譽も蔭がうすい。が、それ程の金力財力が人間に眞の満足を與へてくれるか、人間を人間らしいものにしてくれるか。人間の人間たる價値を作つてくれるかといふことである。

金は眞の満足を與へるか

眞の利益とは眞の満足を與へるものでなくてはならない。眞の満足とは肉體ばかり

でなく、心がそれに伴はなくてはならない。金銭は肉體の上に、ある程度の満足を與へるであらう。しかし、心がそれに伴はないのは誰もの經驗である。また道理から考へても人間が物質以上の尊い心靈、苟も神に肖せて造られた尊い靈魂を有つてゐる限り、單なる物質のみによつて満足の出來ないのは當然のことである。

のみならず慾望には限りが無い。有るが上にも得たい、得たるが上にも、なほ掴みたいと望んで、もう、これで充分だと言ひ得ぬ。そればかりか、足る事を知らぬ人には萬事が不足、不足、不足で日を暮す。

永續きのせぬ利益

假に一步譲つて、この利益、即ち金錢を得る事によつて眞の幸福、眞の満足を與へられるとしても、果してその利益、その富が何時まで續くものであらうか。一時に巨萬の富を掴んだ所謂俄成金が、槿花一朝の夢、無一物になり果てた例は餘りに多い事

實ではないか。

たとへ、さうした逆さまな運命に遭はないとしても、その幸福、その利益を何時まで、また何所まで持ち續けて行けるであらうか。どんな人でも、それを「墓の彼方」までは運ぶ事は出来ないのである。一朝「死」が襲うて来れば、その所謂「利益」なるものも、人間から離れ去るのである。

罪惡の伴ひ易い利益

それのみか、この利益の爲に心が迷ひ、眼がくらみ、墓場が口を開けて待つてゐることも氣付かず、明けても、暮れても利益、利益と、利益のみを追ひかけ廻し、それを得る爲には不義不道德をも敢て意に止めず、何等の耻づる所もなく、自ら罪を重ねて外道に落ちて行く。

何時の世にも絶えたことのない幾多の疑獄と、その曝露される所の醜惡な事實！明

治、大正、昭和の今日に至るまで、その主なるものだけでも「教科書事件」「日糖事件」「海軍シーメンス事件」「松島移轉問題」「賣動事件」その他收賄、詐偽、買収、砂利を食ふ人、鐵を嚙る人、ありとあらゆる不正事件が次から次へと明るみに曝け出されて、鼻持ちのならぬありさま、それに關聯して所謂名士とか名門とか政治家とか教育家とか軍人とか實業家とか、さては清廉潔白の士として自他共に許した人までが法の制裁を受けねばならぬ原因は、不正の「利益」に眼の眩んだ結果であつて、たとへ法網を巧みにくぐる事ができても、それが何の利益になるだらう。利益どころか自分で自分の價値を落して行くとは、何と情ない氣の毒なことではあるまいか。

得易からぬ利益

しかもその利益、即ち富を得るといふ事は必ずしも萬人が萬人、望むがまゝに得られるものではない。その普遍的でない物を、特に己がものにしやうとするから、そこ

に不正、不義がついてくる。そして一朝死が訪れる時、貯へたものを後に遺して、そのために作つた罪のみを背負つて、靈魂の裁判者である神の前に立たねばならんとは富といふ利益も案外引合はぬものではなからうか。

愚かなる者

利益を収め富を積むのに成功した人は世間から「成功者」と呼ばれる、「賢い人」といはれるが、神様はそれらの人に對して何といはれるか。

「愚なる者よ、今夜汝の靈魂とらるる事あるべし、さらば汝の備へたる者は誰がものとなるべきぞ」(ルカ傳十二の廿)

また、

「人全世界を贏くとも己が生命を損せば何の益あらん、またその生命の代りに何を與へんや」(マタイ傳十六の廿六)

所謂利益は其の人が死ぬのと一しよに、忽ち所有權が消滅してしまふ。所有の年數からいつても、僅かに三十年か五十年、まことに頼りのないことである。

果して子孫の利益か

或人はいふ。いや、それは我れ一生のものでない。子孫の爲に美田を買ふのだといふ。しかし、それが果して賢い途であらうか、物質の遺産は子孫の爲にどれほどの利益を與へるか。多額な物質の遺産を受継いだ者、必ずしも幸福とは限らない。

悪銭素より身に付かず、勞せずして得た富に、何の價値があらう。かへつて、それを我儘勝手に浪費する結果、身を持ち崩し墮落して、社會に害毒を流してゐる實例はありすぎる。中には子孫の爲に財を積むと一しよに、不義不徳の足跡を添へものに遺してくれる親さへある。利益どころの話ではない。それこそ實に愚の骨頂といふべきであらう。

眞の利益

然らば眞の利益とは何かといへば、先づ「足る事を知る」こと、即ち満足である。これは大なる利益である事はいふまでもないが、さりとて無一物の者が餘儀なく「足れり」と諦めたり、または富に對する反抗から空威張りに「足れり」とするのや、或は小成に安んずる等は決して眞の満足でなく利益でもない。有たない者は結局無一物である。

神を敬ふこと

然らば如何にして足りないものでも足る事を知ることができるといへば、「神を敬ふこと」即ち「敬虔を守ること」である。

神とは宇宙萬有の創造者、われらの父である。つまり、その天の父を敬ふ事である。

しかし、こゝにいふ所の「敬ふ」とは、唯神の存在を頭惱で合點したといふだけでなく、また「敬神の道」といつて形式や習慣を守る事ではない。勿論習慣的に聖書を讀み、祈をし、教會へ出席することでもない。神を敬ふとは、どんな場合、どんな時でも、神の前に恥なき悔なき世渡をすることである。言をかへていふならば、神と我との間には何の障壁もない、神は我の神、神さまは我の父、神と我とは渾然一體といふ生活である。そこに、たとへ物質的には富まなくとも眞の満足を經驗することができるのである。この眞の満足を經驗した古への詩人は神を羊かひに、自分を羊にたとへて

「エホバはわが牧者なり、われ乏きことあらじ」

と、うたひ、更に、

「わが杯は溢るゝなり」

と、うたつてゐる。

元來、神の子供として造られた人間が神さまを父として持たない限り、どうして眞の満足があらうか。これは實驗であると共に眞理である。かうした眞の利益をしつかりと握つてゐる者が、此世の富を興へても、それに迷ふたり、それを誇つたり、その奴隸になつたりはしない。たゞ富を父よりの委託物として父の聖旨に従ふて有益に使用する事を忘れないまでである。故に、たとへ明日の食ふ物に差つかへるとも

「金も我もの、銀も我もの」

と仰せられた神を我父としてゐるから何の思ひ煩もなければ心配もない。こゝに世の千萬長者達の考へも及ばない大満足がある。

而もこの我らに、この大満足を興へる眞の利益は短い此世かぎりのものでなく、永遠より永遠に續くもの、即ち永遠に神を父とし神の聖榮に興かり得られるが故に、その子孫に所謂遺産を遺さずとも、神を敬ふて送る高潔なる生涯と、その足跡を遺すならばこれ以上の遺産はないのである。

眞の利益を我ものにするには？

そして、この最大の利益を我ものにするには、神と一つになることである。しかし神と一つになることを邪魔する障害物は我らの罪である。故に先づ罪の始末をしなくてはならぬ。そこにキリストの十字架が入用である。キリストの十字架の犠牲は實に神と我らを一つにす爲になされた贖の死である。

我らは先づ自らの罪をはつきりとみとめ、神に向つては悔改め、主キリストに向つては信じ頼る時、我らの罪は悉く赦され、神と親子の關係に入れられるのである。かくてこそ、どんな境遇、どんな事情の下にあつても、富にも貧しきにも、眞の満足と眞の平和と眞の喜びを味ふことができるのである。これが眞の大利益でなくて何であらう。

眞の幸福

「その徳をゆるされ、その罪をおほはれしものは福なり、不義をエホバに負せられざるもの、心にいつはりなき者はさいはひなり」(詩篇三二の一、二)

幸福を求め世相

「十日戎」は昔から浪花にぎはひの一つ。私は永年大阪に住んでゐるが、毎年一月十日お祭當日と、その前後兩三日の戎神社附近の人出といへば、とても凄じいもので、昨今のやうに交通整理が完全に行はれなかつた頃は、年毎に多数の負傷者、時には死人さへも出したくらゐ。さてその津波のやうな群集は、何の目的で戎神社に押寄せるかといへば、福の神の戎さまに、どつさり福を授かりたいためである。参詣者は先づ、ずらりと列んだ槌の子屋の店で木槌を一挺買ひ求めて境内に入る。そして拜殿

の前に据えられた二三十石も入らうかといふ大樽にながしのお賽錢を投げ入れて柏手の音もさやかに商賣繁昌、家運長久、家内安全、息災延命を祈願する。それから社の裏手に廻つて、先刻買ひ求めた木槌で御本尊の戎さまが坐つてござるおせなの邊りを思ふ存分打ちたゝきながら「戎さん福おくれんか」「戎さん福おくれんか」を繰返すのである。木槌で打つのは御本尊が豊のためださうである。

さて、かうして、福が授かるか授からないかは別として、かうした人たちの授けてもらひたい福とは何かといへば、祈禱の中にもあるやうに、つまりはお金を儲けて、長生して幸福に暮したいといふのがそれである。

眞の幸福

しかし、金儲や長生が果して幸福といふものであらうか。さうした祈願を残らず叶へられてゐる人を果して幸福者といひ得るだらうか。無論それらも幸福には相違な

らうが、更に人間をより幸福にするものが他にないのでなからうか。

三千年も昔のこと、ユダヤといふ國の田舎町にダビデといふ人があつた。ダビデはエサイといふ人の息子で八人兄弟の末子に生れた。少年の頃から父の羊を牧つて暮してゐたが、天才といはうか、詩を作ることに、琴を弾くことに優れた才能を有つてゐた。彼、少年ダビデは戰場にゐる兄の許へ使ひに行つた。折しも現れた敵の大將ゴリアテを小石一つで打ちとつた、その拔群の功績を國王に認められ、遂に召し出だされて大宮人となり、國王にお仕へ申す身分となつたのである。そのことだけでも、大した出世であるのに、ダビデは、その後、自ら王位に即き、四方の敵を平げ、善政を布き國家を泰山の安に置いた。彼の名聲は頓に擧り、周圍の人々は、一齊にかれを敬ひ且つ尊んだ。彼の得意や思ふべしである。

しかし、ダビデは、かゝることをもつて決して幸福とは思はなかつた。さらばダビデは何をもつて幸福としたか。聖書の中の詩篇といつてダビデが自ら作つた詩を集め

てあるところに次のやうな一句がある。

『その愆をゆるされ、その罪を掩はれし者は幸福なり』

即ちダビデが幸福としたのは、羊かひが王さまになつて人に羨まれるほどの破天荒の出世でもなければ、連戦連勝、凱旋將軍の得意さでもない。また周圍の人々に絶大の稱讚と尊敬を受けた喜でもない。たゞ自らの罪愆を赦され掩はれたこと、そのみが、何ものにも換へがたい唯一つの幸福であつたのである。

眞の幸福を得られぬ原因

ダビデは、ある時、恐るべき罪を犯した。それを自らの王威を亂用して、人前を巧みに胡麻化し、平氣を装ふてゐたが、良心の苛責は、どうすることもできず、日夜悩み苦んだのである。それを彼は同じ詩篇の中に次のやうに歌つてゐる。
『終日哀み叫びたるが故に』

わが骨ふるび衰へたり
汝の聖手は夜も晝も
我上にありて重し

わが身の潤は變りて
夏の早の如くなれり

ダビデの權勢も、富も、才能も、この深刻な懊惱苦悶を醫する術とはならなかつた。

これはダビデのみの有する獨得の經驗であらうか。世の中に他人目には如何にも幸福さうに見られてゐても、事實は反對に、ダビデと同じやうな經驗をなめてゐる人が案外多いのではなからうか。「いや、他人は如何であらうと私に限つて、さやうなことは決してない、第一、私は罪なんかは毛筋ほども犯したことがない」といはれる方もあらう。しかし、それは、罪の無い證據ではなく、罪に對する感覺が鈍れてゐるだけのことである。

天下に義人なし

我こそは、嘗て一度たりとも、自分の良心に咎めるやうな事は、行爲には勿論口にしたことも、心に考へたこともないといはれるか、恨み、妬み、罵り、驕り、時として、いやしい心持で男は女を、女は男を見たことがないか。或は惡事を行はぬまでも、善と知りつゝ進んで、その善を行はなかつたことはないか。惡が行爲に現れた時それは無論罪であるが、行爲に現れるまでの穢れた、間違つた動機が既に罪であるのみならず、神の前には、進んで善と知りつゝ善を實行しないことも罪となるのである。深夜、人靜まれる時、わが胸に手をおいて、過ぎこし方を考へるならば、果して我に悔なきを得られるであらうか。

さうした過去或は現在の怖るべき罪の惱にさいなまれる時、たとへ、我らが如何なる幸福な境遇に置かれてゐても、その幸福は眞の幸福でないことを、しみぐと悟

り、ダビデと同じやうに日夜堪へがたい心の重荷と夏の早のやうな魂の饑渴、骨髄に達する苦惱を覚えざるを得ないであらう。

しかしながら、ダビデはこの苦痛、懊惱の中に、不思議にも驚くべき幸福を發見した。それは何か。前にも述べたやうに神によつて、その愆をゆるされ、その罪を掩はれし者の幸福であつた。即ち自ら犯した罪愆のために心にこびりついた堪へがたい重荷をとりおろされ、夏の早のやうに餓渴してゐる魂に生命の水を與へられた幸福である。こゝにダビデの苦と涙の歌は忽ちに喜、感謝の歌に變じたのである。彼はうたふ。

「汝わが罪の邪曲をゆるし給へり」と。

幸福を得る道

罪の報は、この世のみで終るものでない、永遠に續くものである。そこに罪の恐ろしさがあり、同時に罪を赦されたものの大なる喜がある。

然らば、ダビデは如何にして、神から罪を赦されたか。ダビデの罪を赦し給ふた神は我らの罪をも赦し給ふのであるか。

ダビデの骨髄に達する苦惱は、その罪のためでもあるが、その罪を隠してゐたといふことが、その原因の一つである。國王といふ體面から、尊敬し信任し切つてゐる人々の手前から、己の罪を告白し懺悔することに躊躇した。しかし、罪を隠して、白つぱくして、如何にも善人の如くに見せかけてゐることは、更に偽善の罪を重ねることになつて、いはば罪の上塗りである。罪は始末を付けないですてておくほど、大きくなり、多くなり、廣くなり、深くなる。まるで脱疽のやうな恐ろしい性質をもつてゐる。しかしながら、ダビデは、日々に増し加はつて行く罪と、その苦惱のためには、いつまでも世間ていや、體面にこだはつてはをられなかつた。殊にダビデは神を畏れた。

そして神のまへに思ひ切つて己の罪を告白し、懺悔し、悔改め、神が、己の罪の邪曲を赦して下されたと確信したのである。

皆さまよ。眞の幸福とは即ちこれである。神の御獨子イエス・キリストが、この世に降つて、十字架の上に死に給うたといふことは、我らの身代りとなつて、罪の重荷を引き受け、我らに罪の赦を與へ給ふためであつた。我らは、最早人前や體面にこだはつてゐる時でない、一切の罪を告白し、悔改めて、イエス・キリストにおすがり申すことだ。そこに眞の幸福は、我らのものとなり、我らの苦惱もまた變つて喜び感謝となるのである。

『もし罪をいひあらはさば、神は眞實にして正しければ、必ず我らの罪を赦しすべての不義より我らを潔め給はん』(ヨハネ一の九)

この眞の幸福を握つてこそ、金儲といひ長生といひ、人生は大いに意義あるものとなるわけである。先づどなたも眞の幸福をお握りなされ。

眞の救

『斯の如き大なる救を等閑にして、争でか過るる罪を得ん』(ヘブル書二の三)

三世の救

救といふ語には廣い意味があつて、いろんな場合に使用される。救済、救護、救命、救災、救病、救難、救恤など、擧げて見れば限りがないが、何れも困難から苦痛から危険から救うといふ意味であるから、救といふ語は人生にとつて最も必要の多い、最も有りがたい語である。殊に寄邊ない老人を救うための養老院、貧しい病人を救う施療院、兩親を失つた憐れな孤兒を救う孤兒院、その他癩病院、瘋癲院、盲啞院などの救済機關によつて、如何に多くの氣の毒な人々が日々に救はれて行くことであらう。そして、これらの救済事業が多くキリスト教によつて行はれてゐる事は誠に慶ぶべきこと

とである。

しかし救は、たゞ、目に見える困難、苦痛、危険から救うといふのみでなく、もつと深い意味がある。漢和辭典で救といふ字の意義を見ると「悪をスクヒ止め」或は「悪を戒め止むる義」とある。この字義から見ても救とは單に外部的のみでなく、もつと内面的な人間悪を救済するといふ意味がある。

キリスト教では、よく、この救といふ語を使用するので、ある人はキリスト教に行けば何でも救うてくれるといふので難澁してゐる人や苦んでゐる人はキリスト教に行けばよいなどと考へてゐるが、無論そんな特別な氣の毒な人も助けはするが、寧ろそれは附たりの仕事であつて、キリスト教でいふ救といふのは最も人間の根本的の救で、つまり、人間を罪から悪から救出す意味である。だから多くの人の考へてゐる救が物質的、肉體的、現世的であるのに反して、キリスト教でいふ救は精神的で靈的で、そして、現世ばかりでなく、過去、現在、未來の三世に亘る救である。

過去の罪から救はれること

キリストの救は先づ過去の罪から我らを救うのである。

人の心には何故不安や煩悶や苦痛があるか。貧乏のためか、病氣のせいか。貧乏のためなら金持にさへなりや、そんなものが消えて失くなる。病氣のせいであるなら健康にさへなりや、そんなものから救はれやう。けれども金持にでも健康なものにでも、やはり不安や煩悶や苦痛はつきまとふ。して見れば原因は、さやうな外部的のもののみではない。もつと奥深いところにあるに相違ない。それが罪である。殊に人間を第一に苦めるのは過去の罪である。慌たしい我らの生活は、我らの過去に於て重ねてきた罪愆を、つい忘れさせてはゐるが、深夜人静まつて一人胸に手を置いて靜かに考へるとき、恐ろしい法律上の罪科はなくとも、友人の間に、兄弟の間に、親子の間に夫婦の間に作つた不義理、不道德、不遜など様々の罪愆が生々しく記憶の中に生きか

へつてきて、如何に我を苦めることであらう。

「一時の腹立とはいへ、あのやうなことをいふのでなかつた、するのでなかつた。思へば思ふほど、考へれば考へるほど、恥しくて、情なくて、すまなかつたすまなかつた、悪いことをしてしまつた。しかし、もう何とも取り返しがつかない

51

罪の思ひ出ほど實に深刻に人間を苦めるものはない。

然らば、如何すれば、この苦惱から脱することができるか。こゝにキリストの救がある。キリストは、我らを苦める過去の罪を御自身がお引き受け下された。そのためにキリストは我らの代りに罪人となつて十字架の上に死に給ふた。何といふ貴い犠牲であらう。

といつて、キリストに救はれた者は、最早罪の思ひ出がなくなるかといふと決して、さうでない。我らは神さまに近づき、キリストに來るほど良心が鋭く働いてくる

から、罪の思ひ出はますます深くなる。けれども、しかし仕合せなことには救はれない以前は、我らを深刻に苦めた罪の思ひ出が救はれた後には、それと全く反對に「ああ、かくも罪深い我を、神さまの御獨子が御自身を犠牲にしてまでお救ひ下さるとは何といふ有難いことであらう」と、たゞ量り知られぬ神さまの御恵みに、キリストの愛に、身も心も解けんばかりの感謝と歡喜に代るのである。

物凄いの告白

それは維新前の話、彼はもと伊豫の劍客であつたが、江戸在住の當時、買求めた新刀の切味を試すべく、そゞろ歩きのある日の夕方、寂しい小路で行き遇ふた一老人を物の見事に斬り捨てた。彼は新刀の切味と我が腕の冴えに會心の笑を洩らして、そのまま我家に引きかへし、床に就いたが、さて、どうしても眠れない。うつ／＼としてゐる中に夜もいたく更けたが、ふと氣がつくと、血みどろの宵の老人が枕頭に立つて

ゐるではないか。彼は宵の元氣もなく、ふるへあがつてしまった。無論それは夢か幻であつたらうが、それ以來同様のことが屢々繰返された。彼は良心の苛責に堪へ兼ねて酒と女にその苦惱を忘れやうとした。しかし、それは無益であつた。彼は考へた揚句に女房を娶つた。妻帯の喜は幸に怖るべき記憶から彼を遠ざけた。が、こゝに恐るべき一場面が展開されやうとは彼の全く豫期しなかつたことであつた。

蒸し暑い夏の夕方、晩食の折柄、何氣なく語る女房の話——かいつまんでいへば、女房の實父が幾年か以前に亂暴侍の辻斬の刃にあへない最後を遂げたとのこと、これだけでも彼は慄然として持つてゐた猪口を思はず下に落した。それから、いろ／＼きいて見ると、その時刻、その場所、斬られた父親の容子、至ては、自分が嘗て試斬の犠牲にした、あの晩の老人がそれに相違ないことがわかつた。話は芝居がかかるが、つまり知らぬことゝはいへ、敵同士が夫婦になつてゐたといふわけ、——彼は事情を明かさず女房を離別してしまつた。

其後江戸が東京と改稱された明治のある年、市中の某所で、ある夜キリスト教の説教會が開かれてゐるのを好奇心半分で聞いて見た。その時牧師は熱誠を込めて人間の罪について、キリストの救について語つた後

「たとへ人殺しをした人間でも」

と一段音聲に力を入れた時、彼はすつかり度膽を抜かれてしまつた。人殺し！あの牧師は自分の過去の凡てを知つてゐるのでは無いかと恐ろしくなつて、その夜はそのまゝ逃げ歸つたが、翌朝再び牧師を訪ね、お導を受けて凡てを告白し懺悔し悔改めてキリストを受入れた。その時、罪の赦の確信を得て、肩の荷が軽くなり、心に初めて眞の平安を得た。その後、彼は警視廳へ自首したが既に事件は時効にかゝつてゐた。彼は感慨深く語り終つて、更に言葉を續け

「其時までは思ひ出す毎に身の毛もよだつほど恐ろしかつた罪障が、キリストによつて救はれた後の今は、思ひ出す度に恵み深いキリストさまへの感謝で胸が一ぱいに

「なりません」と付け加へた。

聖書の實例

過去の罪の思ひ出が恐怖となり或は感謝となる両方面の實例を聖書について見るならば、一つはヘロデ・アンテパス王で、他は使徒パウロである。

ヘロデ・アンテパス王は、己の不義を諫言した義人バプテスマのヨハネの首を斬つた。しかし、この暴君にも良心はあつた。その後彼が極度の不安に襲はれてゐる時、イエスの名聲を耳にして「それは、まさに己が首を斬らせたバプテスマのヨハネが生れ更つて來たのだ」と震ひ上つた。心に過去の罪を抱いてゐる時、風の音にもおびえずには居られないのである。

使徒パウロは最初サウロといつてキリスト教信者を極度に苦めたものである。けれ

ども、一度悔改めてキリストを信じ救はれた時、自ら「我れこそは罪人の中の罪人、悪黨の張本人だ」と告白した。この告白は彼の苦痛から出たものであらうか、さうでない。「かほどまでの罪人さへも救ひ給ふ神さまの恵、キリストの愛を思へば、實に自分こそは仕合せもの、張本人だ」と、限ない感謝と喜を逆にいつたものである。百圓の借用證書に棒を引いてもらつたことも嬉しいが、百圓よりは千圓、千圓よりは萬圓、多くなればなるほど一層棒引の有がたさがふえるわけである。パウロが自ら罪人の張本人だといつたのは、この道理である。

しかし、これは他人ごとではない。今、あなたを苦めてゐる過去の罪があるならばキリストに持つて來ることだ。あなたの不安は必ず感謝に變ることを保證する。

現在の罪から救はれること

しかし、過去の罪から救はれても現在の罪はどうなるか。といふわけは、例へば古

い借用證書に棒を引いてもらつたとしても、棒引と同時にまた新しい借金をこしらへたならば、どうなるかといふことである。いくら過去のものが折角始末できても、また新しいものが、だん／＼に過去のものとして残つて行くではないか。

そこで考へることは、過去の罪から救はれると一しよに、現在の罪からも救はれなくてはならないことだ。借金の癖のあるものは、いくら過去のものに棒を引いても、また借金をする。同様に過去に罪を重ねてきたものは、過去の罪から救はれても、また罪をつくる癖をもつてゐる。それでなくても、人間には罪の傾向がある。そこへ罪の力が手傳つて悪に引き込まうとする。この罪の癖、罪の傾向、罪の力から救はれなくては、過去の罪から救はれただけでは、到底善に向つて進んで行くことはできない。

しかし、感謝すべきはキリストの救である。過去の罪から我らを救ひ給ふキリストは、更に我らの現在の罪の癖、罪の傾向、罪の力から救ひ給ふのである。我らの過去の罪をわが身に引き受けて十字架の上に死んで下されたキリストは、死をふみにじつて再び生きかへり給ふた。キリストは現在生きていらつしやるのだ。その生きていらつしやるキリストが現在の罪から我らを救ひ給ふのである。即ち再生のキリストが我らの魂に入つて、我らの罪の癖、罪の傾向、罪の力を取り去り、打ちひしぎ、我らを再生せしめて、神さまの子供としての義しい潔い生活に導いて下さるのである。

Tさんの悔改物語

Tさんは雛妓から藝者、藝者から女將と、この社會での天晴れの成功者であつたが、ある年旦那の病氣、それに、いろんな蹉跌が手傳つて、Tさんを煩悶、苦痛のどん底へ投げ込んだ。折柄大阪のわが自由メソヂスト第一教會の前を通りかゝつて、計らずも耳にしたキリスト教の話——Tさんはどう／＼悔改めて、それこそ、ほんとに天晴れなクリスチャンになつた。その後、旦那も救はれた。Tさんにこれ以上の喜

があらうか。

しかし、こゝに極めて困難な大問題がTさんの前に横たはつてゐた。それは現在やつてゐる罪な商賣のことである。廢業の當然なことは判り過ぎてゐる。けれどもパンを如何するか。今更、おいそれと新しい職業は待つてゐない。経験もない。一方良心の刺戟はいよゝ鋭くなつてくる。Tさんの煩悶苦痛は以前に増した。しかしTさんは遂にこの戦に勝利を得た。大正五年十二月三十日、正月といふ紋日を眼の前に、抱へてあつた娘たちを無條件で解放し、斷然と廢業してしまつた。

その後のTさんの生活は二階借の手内職、他人目にはずるぶんと惨めな生活であつた。しかしTさん自身にとつては、とても他人の味はへぬ喜と感謝とで胸は一ぱいであつた。旦那は三十年來の飲酒を止めた。健康は回復した。二階の破れ障子の間から朝ごとに讚美歌が洩れて來た。數年後旦那が安らかに天國へ旅立つてからTさんは聖書の研究に骨を折つた。熱心に傳道を助けた。何といふ驚くべき變化であらう。T

さんは今も健在で、わが教會の善き證人として仕合せな日を送つてゐる。

どうかして惡をすて、善に進まうとする眞剣なあなたの中に、とかく、その反對に惡の方へ共鳴したがるものがゐないか。そこへ附け込んで、あなたを惡の力へ引き戻さうとする誘惑の力の餘りに強いことに氣付かれるか。然らば今、現在の罪から救ひ給ふキリストにお縋りなされ。あなたは斷然惡をすて、善に向つて雄々しく進み得られることを自ら實驗せられる。

未來の罪の審判から救はれること

過去と現在の罪から我らを救ひ給ふキリストは、更に未來の罪の審判から我らを救ひ給ふのである。

人間は一度死ぬことがきまつてゐるやうに死後義しい神さまの前で審判を受けることもきまつてゐると聖書は我らに教へる。聖書が教へなくとも人間が一度死ぬること

は判りきつたことである。しかし死後の審判なんか誰が見て来たわけでもなし、そんなことが、どうして信じられやう。さういふ人に尋ねたい。あなたは、この世で悪事を働きながら、それを巧く胡魔化して如何にも善人らしく世渡りをしてゐる人の多いことを知つて居られやう。もし、それが直接あなたに關係したことで、己の悪事をあなたになすぐりつけてゐるとでもしたらどうでせう。しかも、そのなすぐりつけられた無實の罪がどう言ひ開きしても明かにならないやうな場合、あなたはそれで満足してゐられるか。必ずや、たとへ、この世では黑白は判らなくても、必ずや何時の世にか、あの憎むべき悪人の正體の判る時が来るに相違ないと考へられるであらう。そこで、黑白の審判は未來に於て必ず行はねばならん。でなければ悪事を働いてもこの世限りなら胡魔化しどくといふわけになる。しかし如何に胡魔化しても人間に良心のある以上、自らこの世で審判を受ける。それは未來に於ける審判を我らに教へてゐるのであるまいか。のみならず人間に死の恐怖があり、死に直面して周章ふためくといふの

も、その證據で、見ないからといつて未來の審判を否定することは出来ないのである。

一青年の輝かしい臨終

信仰者の死の床に於ける平和と喜と希望に輝く状は、屢々我らの見るところであるが、Kさんの臨終は、また特に美しいものであつた。Kさんは前途を囑望された少壯實業家であつたが、不幸病を得て再び起つことができなくなつた。しかしKさんの顔は重病の床にあつて常に輝いてゐた。Kさんを見舞ふほどの人は何れもKさんを慰めやうとして却つてKさんに慰められた。臨終の日が來た。Kさんは枕頭に看護する姉君と共に、讚美歌三百五十七番を合唱した。

はるかに仰ぎ見る

かがやきの聖國に

天父の備へまし、

樂しきすみかあり

最後の節は、もう聲が出なかつた。枯木のやうになつた手を力なくあげて上を指して幽かに微笑んだと見る中に、眠るが如く「かゞやきの聖國」へ旅立つた。これが、どうして春秋に富む廿四歳の青年の死と思はれやうか、否、死といふ語は當てはまらない。これは勝利の凱旋といふのが至當であらう。

大なる救を踏み付けるな

かやうにキリストの救は、過去、現在、未來に亘る三世の救である。完全な救である。これが眞の救である。聖書には、この驚くべき救を、たゞごとのやうに考へて無頓着にしてゐることが、神さまの前に如何に大なる罪であるかを警戒してゐる。これは確かに大罪に相違ない。過去の借財を整理してもらつた上に、現在の収入の道を考へてくれ、その上に未來のことまでも保證してくれる恩人を踏み付にするやうなこと

があつたら、それこそ、借財以上の人でないであることは無論である。

願はくば、みなさんが、一人も洩れず、この大なる眞の救に與られんことを祈つて止まないのである。

人生の緊急問題

死と審判

「一たび死ぬる事と

死にて審判を受ける事とは

人に定まれる事なり」(ヘブル書九の廿七)

これは前にも話した通り聖書に記されてゐる神様の聖言で、誰しも否定出来ない所の二大事實である。

即ち人間が一たび死ぬること、死後不死の靈魂が義しい神様の前に引き出されて、善悪の審判を受けなければならんといふことは、定り切つたことだといふのである。

重要問題

「死」とか「審判」とかいふことは餘り耳障りのよくない、面白くもない問題である。

併しながらこれは人間に取つては最も重要な問題で、大いに考へなければならぬ、そして速かに解決しなければならぬ問題である。

人間の一生に解決しなければならぬ問題は多くあらうけれども、甲に大切な問題は、必ずしも乙にも大切とは限らない。かへつて、彼の人の重大問題が此の人の閑問題で、つまり如何でもよいと言う様な場合が多くある。しかし、この「死」といふ問題ばかりは、甲の人も、乙の人も、彼の人も、此の人も、老幼男女、貴賤貧富の差別なく、凡そ生きてゐる程の人間に取つて、是非とも解決して置かねばならぬ重要問題である。

緊急問題

常に重要なといふだけでなく、これは實に緊急な問題である。少しの間も恐圖々々しては居られない問題である。何故ならば、この「死」は何時、我等を襲うてくるかも知れないからである。健康少しも頼むに足らず、無病必ずしも「死」と縁遠いわけではない。

殊に交通機關が完備された今日、交通事故は愈々繁くどれだけ多くの人の生命を奪ひつゝあることか。そのみならず思ひ出すさへ恐ろしい大正十二年の九月一日、あの未曾有の關東大震災、幾萬の貴重な人の生命が、耐震耐火を誇る鐵筋コンクリートの建築物と共に、一瞬に粉碎されてしまつたのを見る時、果敢ないものは人の生命と言はざるを得ないではないか。

世人の皆往く道

特別な大災禍は例外としても、同じ様な小事實は、關東の大震災の後にも幾度かあつた。將來とても全然その虞がないと誰が保証し得られやう。例へ、突發的なことに出會はず、病にもかゝらず、千年の長壽を保つとした所で、所詮はこの「死」に直面しなければならぬのである。聖書はこれを「世人の皆往く道」といつてゐる。

ある人は何れ研究してといふが、間違つてはいけない、研究問題ぢやない緊急問題である。

美しき死の事實

これをもう少し平たくいふならば、何時「死」が襲ふて來ても、その死に面して少しも慌てず、怖れず、微笑を以て、感謝を以つてこれを迎へるといふことだ。これ

は出来ない相談ではない。この「死」といふ問題の解決者のみが有つところの事實である。

昔から眞の神を信じ、イエス・キリストに依頼んだ多くのクリスチャンは、これを證據立てゝゐる。

一千九百十二年に北海の氷山と衝突して沈みゆくタイタニックの甲板の上で 最後の祈禱を神にさしげ、

「主よ、み許に近づかん」

といふ希望に輝く讚美歌を合唱しながら船と共に海に沈んだクリスチャン紳士の一團のあつたことをごぞんじか。

關東大震火災の當時崩壊されたる建物の下敷となり、燃えさかる火焰に包まれながら

「み使よ、翼をのべ

永遠の故郷へのせ行きよ」

と歌ひつゝ焼死んだ横濱のフェリス女學校々長の最期は何れも死の解決者として、死を超越した眞のクリスチャンのみが有つところの涙ぐましい、しかし幸福な事實である。

愚者とは誰か

皆さまよ、私は斷じて宗教の争ひをなす者ではない。否、さやうなことは最も醜いこととして排する。しかし實際についてお尋ね申したい。貴君は貴君の佛教で、また儒教で、或はその拜金宗で、乃至無宗教で、この問題が徹底的に解決されて居られるか。たとへ萬卷の書籍を漁つても、或は世の中の大成功者として大厦高樓に座し、人から羨まれる環境の中に浸つてをられても、この問題の解決が出来て居ないのでないか。かゝる人に神様は何と仰せられるか。

「愚なる者よ今宵汝の靈魂とらるる事あるべし然らば汝の備へたる物は誰がものとなるべきぞ」(ルカ傳十二の二十二)

己が死あるを忘れ、死の爲に何の準備もせず、その問題を未解決のままに、蓄財にのみ腐心する者に神は「愚者、馬鹿者よ」と仰せられるのである。

考へても御覽じろ。道行く人が他人から「君は何處へ往く？」と問はれて、「さア何所へ往くのやら考へたこともなければ、さつぱりわからぬ」と答へたとしたならば、その人は愚の骨頂でなくて何だらう！ この人生の旅行く人の中に、この種の人の多いのは何としたことか。

神の審判とその豫感

嘗に自分の所有物と離れるといふのみでなく、親しき者と別れる淋しさのみでなしに、無意識の中にも、死を怖れる人の心の中には、死は死で終るのでは無く、それに

續く未來の審判がある證據で、つまり死の恐怖はそれの豫感だと思はれる。

そして神が活ける神であり、正義の神でいます限り、我らの理性に、また道徳性に訴へて考へて見ても合點されると思ふ。萬物の靈長として造られ、永遠を念ふ心、正義を愛する道念を神から與へられてゐながら、僅かな慾の爲にその本性を失ひ、反つて神に逆いてなした、不淨、不信仰、虚偽、親不孝、不情、飲酒、放蕩、怨恨嫉妬など、良心に逆うてなした一つ一つは、その良心といふ律法を與へ給うた神の前に、責任を以て裁かれねばなりません。しかも、その審判の時は刻々に迫つて来る。日々の歩みの一足一足はお互を墓場へ近づかせてゐると同時に墓の向ふの審判の門へ急がせてゐるのである。この世の審判は「證據不充分」であれば罰せられずに済みもしやうが、神の審判は公明厳正である。凡てを見給ふ神の前には一つとして現れないですむ罪はない。如何な言ひわけも無益である。

かく思へば、片時も躊躇はして居れない筈だ。この問題こそは人生の緊急問題であ

る。そして、これを解決するとは、罪の始末を如何するかにある。

問題を解決した人の實話

それでは如何すればこの問題が解決出来るか。理屈よりは解決者の實驗談をこゝに御紹介しやう。

それは數年前のこと。某といふ大學教授の博士が或日曜日の午後、己が屬する教會からの歸り途で一つの葬式に出會した。彼は敬意を表して脱帽し、その柩を目送してゐた時、彼の心に「死」といふ問題が電火のやうに閃めいた。彼は、そのまゝ家へも歸らず、とある森の奥深くわけ入つて切株に腰を下し、やゝ久しく黙想した。彼は「死」に關しては生理學から學んでも居たし、哲學書によつて理解もしてゐた。しかし「自分の死」を眼前に置いて考へた時、彼は震ひ戦かざるを得なかつた。年少の頃、母の眼をかすめて菓子を盜食した些細な罪から、爾來外に顯れた罪、裏に潜める罪、そ

れ等はバナラマのやうに眼前に展開された。彼はその時まで自他共に許してゐたキリスト教信者であつたが、嘗て深刻なる罪の悔改めをしたこともなく、隨つて救はれたといふ經驗も無かつたが、今や彼は鋭い光の下に罪の意識は甦り「罪の價は死なり」といふ聖書の言が心を刺し通した。彼は草の上に倒れて心から罪を懺悔した。そして赦を神に求めて泣いて祈つた。

「主イエス・キリストの血、凡て罪より我らを潔む」平素讀んでゐる聖書の一句が心の中に響いた。彼の胸を壓してゐた重苦しいものはいつしか消えて、嘗て味ふたことのない平安は潮の如く胸に押しよせて來た。同時に今の先まで付纏ふてゐた死の恐怖は名残なく消えて、死こそ永遠の生命に入る望の門との確信が出來て、悲哀は去り歡喜は湧き溢れた。かくして彼は初めて救を實驗したといふのである。

死より生へ

問題解決の道は六つかしいことはない。これは博士でなくとも誰でも出来ることである。

即ち、

第一は、神に向ひては罪の悔改め

第二は、イエス・キリストに向つては信仰すること。

である。この二つの條件によつて、あなたは暗黒より光明に、悲哀より歡喜に、滅亡より救拯に、然り、死より生へ遷される事が出来るのである。

願はくば諸君がこの途によつて、人生の緊急問題を速かに解決されん事を切に望む次第である。

『是故にイエス・キリストに在る者は罪せらるゝ事なし』(ロマ書八の一)

新生命

イエス答へて言ひ給ふ『まことに誠に汝に告ぐ、人あらたに生れずば、神の國を見ること能はず』(ヨハネ傳 三の三)

淺薄な考へ方

或る人々は「キリスト教も要するに悪を止めて善をせよといふ宗教に過ぎない」といふ。果してさうであらうか。しかし、それは宗教といふものゝ、眞實のわけがわかつてゐない人々の淺薄な考へ方である。

キリスト教が最も高い道德的感化を個人に或は社會に與へてゐることは勿論であるけれども、たゞ、それだけを見て、キリスト教は、まことに結構なお宗旨である、どこそこの不孝息子、氣まゝ娘、乃至大飲酒家、無賴漢こそ、キリスト教に入れてもら

うといゝなどと考へてゐるのは大きな間違ひである。

キリスト教が、もし、道徳のみを教へるものならば、それだけがキリスト教の役目ならば、別にキリスト教なんかは必要のないわけである。道徳は人間同志の問題である。しかしキリスト教は神を目安にして人間の生全體について考へるのである。故に道徳よりも更に高い大きい、より根本的の問題である。

生きた屍

人間が萬物の靈長であるわけは、人間に神の品性、神に共通な生命を與へられてゐるからである。もつと簡單にいふならば人間には神心を與へられてゐるといふことである。どのやうな悪人でも心の眞底を叩いて見ると善性がある。そこが人間の價値である。ところが、その價値のある神心が、善性が悪のために掩はれがちで頭を擧げることができない、従つて神の御旨にそふて生きやうと考へ、骨折るけれども、その甲斐

がない。そして人間は生きた屍となつてゐる。けれども、人間の皮をかむつてゐる以上、人間らしく生きなければならぬので、如何にも聖人らしく善人らしく行ひすましてゐるけれども、所詮は羊の皮をかむる狼に過ぎないのである。

幹と枝

キリストは、また、これを葡萄の幹と枝にたとへて教へてをられる。神は幹である。人間は枝である。枝が幹に連つてゐる間は花も咲かう、實も結ばう。しかし枝が幹から離れたが最後枯れてしまふ。人間は神と離れては、全く何ともしやうがないのである。それでも人工的の葉や花や實をつけて一時は人前を胡魔化することもできやうが、結局は、その場のがれの人間細工に過ぎないのである。

かうして根本に生命のない慈善、功德が何にならう。それは屍の踊だ、造花の花見だ。これが即ち偽善といふものだ。偽善は神の最も憎み給ふものである。悪人なほ神

に歸るべき機會を恵まれる。けれども、偽善者は永久にその機會を失ふ。キリストはもろくの悪人には限りない同情と憐愍を寄せ給ふた。けれども、偽善者に對しては「世の中に害毒を流してゐるのはおまへたちだ。おまへたちは毒蛇みたやうなものだ」と、ひどくお責めになつた。そして更に「人間といふ人間は新しく生れ更らなくては神さまのことはわからない」と仰せられる。つまりは、枝葉の道德なんて問題でなく人間の心を根本から作り更へることだ。そして神から新しい生命をいただくことだ。

新しい生命は神から

そこで考へられることは、どうすれば、その新しい生命が得られるかといふことである。それについてキリストがニコデモといふ老人に語られたそのお言葉を、ここへ引いて見ると最も早解りがすると思ふ。

ニコデモといふのは、常々から神の聖旨にそひまつる正しい世渡りをしたいと考へ

てゐる、至極眞面目な老人であつた。ところで、とかく、それが偽善になりがちなので、何とか、もつと根本から土臺からやり直す工夫がないものかと考へた上句、キリストを訪ねて、教を乞ふた。その時、キリストの仰せられたのが、前にもいつた「人間は新しく生れ更らなくては神さまのことはわからない」といふあのお言葉であつた。ところで、ニコデモには、それが合點が行かない。それで重ねて、そのわけをお尋ねすると、キリストは「銅の蛇」の史實によつて、ニコデモをお教へになつた。

それは、昔、イスラエル人（ユダヤ人の先祖）がエジプトの國で奴隸として非常に苦められてゐた時のこと。神さまはモーセを指導者としてイスラエル人をエジプトから救け出して本國カナンにつれかへらせるやうになされた、その長い旅行中のこと、ある荒野でイスラエル人が神の御旨に反いたために毒蛇に噛まれた、モーセは神の命によつて銅製の蛇を竿の尖に掲げて、「これを仰いで見たものは救かる」と宣言した。噛まれた者らの中で、その言に従つたものは救かり、従はなかつたものは死んでしま

つたといふのである。

キリストは、この物語をなされてから、なほ力強く仰せられる。「丁度その銅の蛇のやうに人の子も擧げられる」と。この人の子といふのはキリスト御自身のことである。擧げられるといふのは十字架にかけられるといふことである。こゝに全ての人間が新たに生まれ更る、新しい生命を得る大事な鍵がある。

神人合一の工夫

父なる神の愛は、人間といふ子供と一つになることに燃えてゐる。けれども人間は神に反き神を離れてしまつた。そして神と人間の間には罪といふ障壁ができてしまつた。神は正義である以上、この罪の始末をせないでは無條件に人間との縁つなぎはできないのである。そこにキリストの十字架が必要であつた。神はキリストをこの世に送り、キリストは罪といふ毒蛇に噛まれてゐる凡ての人間のために竿の尖ならぬ十字架

架にかけられて身代となり給ふた。そして神は仰せられる。「このキリストを仰ぎ見るならば救はれる」と。救はれるとはつまり新たに生まれ更ること、新しい生命を内に得ること、離れた枝が、もう一度幹につながつて、神と人間が親子の關係にもどることである。

離れた枝はもとの幹へ

神の方では仕度は既に出来上つた。この上は人間の方で、これを仰ぐか仰がないかつまり、かくまで人間を愛し給ふ神の愛に感激してキリストを信仰するか、せないかといふことだ。もしキリストを信仰し、一切をキリストにお任せするならば、もう外部からの無理強ひでなく、内部に起る靈の革命、生命の流によつて、新しい、潑刺とした、豊かな生活、神の子供としての生活、が始められるのである。これがほんたうの宗教生活、信仰生活といふものである。そして離れた枝が幹につながるなら、養分

は幹から吸ひ上げて枝に送る。そこに自然と善行功德の葉も繁る、花も咲く、實も結ぶ。

なほ有りがたいことは、人間の生命は衰弱もあり、病氣もあり、死もあるが、神によつて與へられる新生命は歩むとも倦まず、走るとも疲れず、常に生々として永遠より永遠につづくものである。これを永生といふ。

聖い生命の流

嘗てアメリカのアダムスといふ人が死に直面した時

「自分はかなり長生きをしたから、もうこのからだは修繕も利くまい、だから自分
はこれから家移をする」

と云つたとのこと。

永遠の生命を有つてゐる者には、死の床にあつても、なほこの安けさと 綽々とし

た餘裕がある。

この生命は永遠であるばかりでなく、善なるばかりでなく、それは實に聖い生命である。

この生命の有る所、そこには聖い品性と高い人格がある。そして、その聖い品性と高い人格の流の行くところ、人間悪といふ穢も潔まる。社會悪といふ疫病をも癒される。

お互は自分のためばかりでなく、人のため世のため、さては神の名譽のためにこの新しい生命を得やうでないか。そのためにキリストの十字架を信じて仰がうではないか。

今は恩恵の時

「祝よ今は恵のとき、祝よ今は救の日なり」(コリント後書六の二)

實らぬいちぢく

イエスのなされた譬話の一つに「實らぬいちぢく」といふがある。
ある人がいちぢくを植えた。目的は無論實を穫るためであつた。それにもかゝら
ず、一向に實がならなかつた。その中に三年は過ぎた。枝はのびる、葉はしげる、が
相變らず實がならない。植えた人は腹を立て、「場ふさぎぢや、伐りたほしてしま
へ」と園丁にいひつけた。しかし園丁は「肥料をやつて見ますから、もう一年我慢し
て下さい、伐りたほすのは、それからのことにいたしませう」と懇願したといふ筋で

ある。

人間の本分

元來、神の子供として造られた人間は、神を父として敬ひ崇め、その御旨にそひまつ
るやうに、聖く、義しく、全ての人を愛して生きて行くのが本分である。この本分と
いふのがつまりいちぢくの實である。ところで人間にそんな實がどれ位なつてゐるか。
なる程、世の中は次第に開ける。人間は次第に賢くなる。しかし神に對する人間の
本分といふものが何處まで盡されてゐるか。

哲學は人間の生命の根本にふれて、神の子供らしい活き方をさせてくれるか。美術
は人間の醜い部分を訂正して聖い義しいものにしてくれるか、科學の力で神が讚美で
きるか、永遠が想へるか。人を愛することができるか。倫理道德まことに結構、しか
し、口先ばかりでは三文の價値もない。

枝はのびる、葉はしげる。しかし一向に實らしい實がならないのが今の世の中のあるりさまである。

たまに實がなつてゐると思つて近よつて見ると、胡魔化しの似せ物か、さうでなければ利己主義の慾で固めた、とても齒もたぬ堅い實で、割つて見ると、悪口、批評虚言、自慢といつたやうな苦さと、不平、不満、呟き、愚痴といつたやうな澁さでいっぱい、實らしい形はしてゐても、實は人間の悪の實。今の世間に案外かうした實の多いのは何としたことか。そこで神は「場ふさぎだ、伐りたほせ」と園丁にお命じになる。

實らせたたいキリストの愛

神の子供としての人間に、神の子供らしい實がならないといふことは、人間が神の子供としての價値が特權がなくなるわけである。それは父なる神にとつては實に堪へ

られないことである。神さまが「伐りたほせ」と仰せになるのは決して無慈悲なからでない。わざ／＼キリストといふ園丁を送つて實のなるやうに、あらん限りの世話をさせなさるのである。

神から送られた園丁キリストは、どこまでも人間を愛して下さる。人間といふいちいかに善い實をならせたいと、神と人間との中間に立つて「もう一年、もう一年」と辛抱強く神さまの最後の手段を延ばしてゐて下さる。

このキリストの愛の絶頂は遂に、御自身を十字架にまで持つて行かれたのである。神にそむいて我が身勝手な世渡りをしてゐる人間を今日までも、安閑として過ごして居られるのは、全く、このキリストのおかげでなくてなんであらう。

愛の感激から眞人間に

ある刑務所に勤めてゐる看守からきいた一人の極道息子の話——生れは伊豫、飲む

打つ買ふのしたゝかもの、親の意見も女の忠告も、馬耳東風、とう／＼罪に罪を重ねて刑務所入り、それも一度や二度でない、果ては彼を知るほどの人は、誰も彼も愛想をつかして對手になるものもなくなつてしまつた。そこで故郷にもゐたゝまらず、何れかへ出奔してしまつた。

こゝに憐をとどめたのは、彼の母親であつた。わが子は母をすてた。けれども母をすてるほどの人でなしを、なほ母はすてかねたばかりか、明けても暮れても、我が子の上を案じて涙の乾くひまもなかつた。幾度目かの刑務所入りをきいた時、餘りの悲みに、とう／＼床についたまゝ、再び起つ見込みもたゝぬ重患に陥つた。それでもなほ、我が子のことを案じつゞけたが、臨終の際に「私が死んだら、私の骨と頭髪を悴に届けて」「母はおまへのことを案じ案じて、こんな姿になつてしまつた」と傳へてくださう」と、頼んだ。

母はまもなく、この世を去つた。某が記念の骨と頭髪を獄中の悴に届け、遺言を傳へた。さすがの彼も愕然として、母の遺物をひいと抱いたまゝ、獄舎の石疊の上に平太張つて聲をあげて泣いた。

母の愛に始めて目がさめた彼は、その後、すつかり心を入れかへて以前とは全く變つた人間になつたとのこと。

誰か子を思ふ母の愛に感激せないものがあらうか。ましてやキリストの愛に。……しかも復活して今も生きていらつしやるキリストは、父なる神と我ら人間の間に立つて常に實のなるまで、實のなるまでと、神におとりなしをしてゐて下さる。しかし、これが、いつまでも續くと思つてゐると大間違ひ、やがて締切りの日が来る。その時は、愛によつて忍びに忍んだキリストなる園丁は最後の審判者として、正義の斧を持つて我らの前に立たれる。恩恵の時は今、救の日は今、この今をのがしてはならない。

空前絶後の機會

嘗てロシアの汽船が、桑港から横濱へ向ふ途中、太平洋の真中で暴風雨に遭うた。危険を知つた乗組員の十名は、ボートを下してそれへ移つた。時は真夜中で海上は眞の闇、ボートは木の葉の如く翻弄され、波のまにまに浮きつ沈みつ漂ふた。彼らは救を求める爲にランプに灯を點けやうとしたがマッチは唯の一本しか無かつた。一本のマッチ！それは實に十人の活殺の權を握つてゐるのだつた。海上はいよく荒れ狂ふた。彼等は一つ所に集まつて、この大切な一本のマッチを、空しく磨り損じないやうにと、何れも心に念じつゝ、一人の手によつて磨り出された。將に生死の瞬間！しかし幸に火は軸に燃え、やがてランプに點けられ、ランプは高く掲げられて救助を呼び、斯くして十人は無事に救はれる事ができた。

諸君よ、今といふ機會を逸してはならん。「今日」といふ日は再び來ない。過ぎた「今」は永久に返らない。

貴君の永遠の運命も「今」といふこのマッチ一本に關はつてゐるのです。

今、キリストを救主として受け入れやう。キリストは我らを父なる神の幹に縁つな
ぎをして、必ず我らに繁く善き實をならせて下さる。父なる神は、その實を收めて植
えた目的を達して限りない喜に入り給ふに相違ない。我らにとつても、これ以上の
仕合せはないのである。

信仰に育つ道

されば凡ての悪意、すべての詭計、偽善、嫉妬および凡ての誘を棄て、いま生れし嬰兒のごとく靈の眞の乳を慕へ、之により育ちて救に至らんためなり。(ペテロ前書二の一一二)

皆さんは近頃信仰の道に入られた。それは、この上もないおめでたいことである。信仰の道に入られたといふのは、講社に入つたとか、何々の團體に加はつとかいふのでなく、神の家族の一人になつたといふことである。神は皆さんの父、皆さんは神の子供、その間には何の隔てもない、少しの邪魔ものもない。罪といふ全ての障害物はキリストによつて取り除かれてゐるから、皆さんは自由に神に抱きつくこともできるし、神はまた、皆さんをいつでも抱き取つて下さることができるのである。否、それでは、まだもの足りない、皆さんは、もう神の外にゐるのでなく、神の内にあるの

である。神の懐の中にあるのである。何といふ仕合せなことであらう。

しかし、こゝで考へることは、母の懐に抱かれてゐる赤ん坊がいつまでたつても成長しなかつたらといふことである。赤ん坊が成長しないといふことは親にとつてもその赤ん坊自身にとつてもどんなに不仕合せなことか知れない。

キリストによつて新しく生み出され、神の懐にある皆さんの靈も同様、だんくんに成長しなかつたなら天の父なる神に對しても、キリストに對しても申しわけのないことであるし、皆さん自身にとつても不仕合せなことである。

それでは、靈は、どうすれば成長するか。言ひかへれば、信仰の道には入つたが、どうすれば信仰の道に進んで行けるかといふことである。これについて二三の大切な事柄を次にお話しやう。

聖書を讀むこと

先づ第一に聖書を読むことである。生れた赤ん坊の一番の肉となり血となるものは母の胸から出る乳である。聖書は神の愛の心から流れてた心を養ふ眞の乳である。

イギリスの大政治家グラッドストーンは「もし人の心中に深き愛ある時、或は生活上に堪へ難き苦痛を覺ゆる時、勇猛心を揮ひ起して、その憂を拂ひ、苦痛を去らしむるため、専心依頼すべきものは何なりや」と余に問ふ人あらば、余は「それは最も尊き、最も善き神の賜物なる聖書なり」と答ふべし」と、いつてゐる。

聖書を読まう。しかし、聖書を読むには次のやうなことを心得てもらひたい。

〔一〕 神の言として讀むこと。

子供が遠方に行つて居る父から手紙をもらつたら、たとへ父の姿が見えなくとも、どんなに、それを喜んで讀むことであらう。聖書は天の父が人間といふ可愛い子供に下されたお手紙と思へばよい。

〔二〕 絶對の信頼をもつて讀むこと。

父の手紙を疑つて讀むものがあらうか。我らを徹頭徹尾愛し給ふ天の父から下された手紙に聖書をどこまでも信じて讀ませう。

〔三〕 祈をもつて讀ませう。

天の父からいたゞいたお手紙に聖書の意味が解るやうにと、祈の中に讀むこと。他のものには解らない六かしいところでも、さうした熱心のあるものには天の父が解るやうにして下さる。もし、解らないところがあれば、いつか解らせて下さる時が来る。

〔四〕 毎日讀むこと。

たへすぎると食飽をする。聖書も始から讀み過ぎるよりは少しづつ、毎日欠かさず時を定めて讀むこと。

〔五〕 規則的に讀むこと。

聖書は舊約三十九卷、新約廿七卷にわかれてゐるから、舊約の始からと新約の始か

らと章節を逐ふて順次に読んで行くがよい。

〔六〕 聖書の註釋書が色々あるから、牧師に相談して適當なものを撰擇してもらふがよい。

祈ること

聖書を御飯とするならば、祈は呼吸である。御飯を食つても呼吸をしないでは生きて居れぬ。

聖書を神の言、神から人間に下さつた手紙とするなら、祈は人間から神へのお返事とでもいはうか、つまり神へ向つて話しかけることである。親に話のできない子供があつたら、どんなに不仕合せだらう。神に祈らぬものは同様、この上もない不仕合せである。

しかし間違つてならんことは、祈といへば定めし六つかしい文句があらうと思ふが

決して決してさうでない。子供が父に話すやうに、ありのまゝがいのである。

なほ祈には次のやうなことがらを心得て置く必要がある。

〔一〕 信じて祈ること。

父は愛するものゝ願を必ずきゝ届けてくだされる。その獨子キリストさへも我らのために下さる父なる神は、どうして、我らの祈をきかれないことがあらうか。

〔二〕 キリストの名によつて祈ること。

父なる神と皆さんとの縁つなぎは全てキリストがやつて下さつた。そのキリストは常に皆さんが神のものであることを證明して下さる。我らのお祈も「キリストの名」といふ證印によつてきいていたゞける。

〔三〕 静かなところで祈ること。

騒々しいところでは親ともゆつくり話されぬ。況して神との對話に静かな場所が必要である。それには早朝か、夜更がよい。

〔四〕 絶えず祈ること。

呼吸は時々休んで、入用な時だけするのでない。祈も叶はぬ時の神だのみでなく常に祈つて神との交通を断たぬやうにする。

集會に出席すること

「三人寄れば文珠の智慧」といふことがある。一人で静かに神に祈ることも必要だが、また三人五人さては十人二十人と同じ信仰の人たちと一つところに集つて、神を中心として互に信仰上の打明け話をしたり、感謝したり、祈つたりすることは、靈の上に互に非常な益をするものである。また、勝手に讀んでゐても一向に解らない聖書のお講義を聞くことなどは信仰に進むためには最も大切なものである。故に祈禱會、聖書研究會、家庭集會などにはつとめて出席するがよい。

殊に一週一度の禮拜説教には何を繰合はせても、神を拜むために教會に出席したい

ものである。

信仰を告白すること

信仰に入つた以上は、それを大膽に告白すべきである。周囲の都合で色を變へるカメレオン見たやうな意氣地のないことで、どうして信仰に進めやう。旗色を鮮明にして神の兵士として前進すること。卑怯な真似は禁物である。旗色を鮮明にすれば自ら責任も感じるし、他人からも認めてくれるから自然自重ができる。といつて口先ばかりのクリスチャンで、實行の伴はぬものは、これまた甚だよろしくない。神のお助を蒙つて、どしどしと善を實行することである。なほ油断をしてならぬことは、常に自分の弱いことを知つて全ての惡に遠ざかることである。俺はもうクリスチャンだから、そんな誘惑にはかゝらないと、惡に近よることは最も愚な事である。惡に遠ざかり善を追ひ求め全ての事に於て神の名譽となるやうに進みたいものである。

活動すること

運動不足は病氣のもと、クリスチャンも運動不足になつてはいけない。神の恵、キリストの愛を受けたならば、それをどしどし他人にも分け與へることだ。危いところから救はれたなら、危いところにあるものを救け出すことだ。他愛奉仕救靈傳道（たいあいほうしきうれいでんどう）の精神は我らをして更に新しい恵と愛をいたゞく道であり、信仰に進む大切な道である。

傳道、救靈などといふと一かどの學問が要るやうだが、それは専門家がやつてくれる。それよりも實驗體驗は理屈の上からの傳道に裏書きする生きた傳道である。友人を集會につれてくることも傳道である。その他讀物をあげること、訪問すること、目指す一人でも二人でも定めて救はれるやうに祈ることも傳道である。もし私たちが一人の人でも信仰に導くことができたなら、それは實に世の中の大事

業家よりも更に更に尊い大きい仕事をしたのである。

願はくは、停滞停止することなく前進また前進、折角の救を最後まで全うしていただきたいものである。



Printed in Japan

不許
複製

昭和五年十二月十日印刷
昭和七年十一月一日發行
昭和八年四月十日再版
昭和九年三月十三日四版
昭和十一年四月十四日五版
昭和十一年十二月一日六版

著者 河邊貞吉

發行所 西阪保治

大阪天王寺區藤田町二丁目五番地

印刷者 矢張左馬紀

大阪東區鶴橋之町一ノ五八七五

印刷所 日本製本株式會社

大阪東區鶴橋之町一ノ五八七五

安心の秘訣

定價金拾五錢 (送料四錢)

發行所

大阪天王寺區
悲田院町二八

日曜世界社

電話天王寺九八五番
振替大阪壹六七四番

信仰者の身の上話

日本基督教中央教會牧師 齋藤敏夫 著 四六判一〇〇頁 定價一部拾錢送料二錢 【好評重版】

基督教はたゞに學說や思索ではない。「來りて觀よ」の宗教である。人間の生活に活きる福音である。働く者、生ける基督を見んとすれば論より證據、信仰者を見るに如くはない。その『事實は小説よりも奇』なる二十有餘人の人々の思寵の記録を、手に入つた平易な書き方で物語つたのが本書である。基督者の生活ぶりを見よ。キリストを二千年前の物語としたのではなく、現代に生かして行く信仰者の身の上を讀まれよ。基督の燃ゆるが如き愛が神國建設の途上を急ぐ我日本に、同胞の中に雲の柱、火の柱となつて、活き働きつゝある事實を目前に見ることを得よう。

蓋し傳道用、慰問用として、また、贈答品として、最も意義あるものである。大方の御愛讀を待つ。

發行所 大阪天王寺區悲田院町二八 日曜世界社 電話天王寺九八五番 振替大阪壹六七四番

329

681

Printed in Japan

不許
複製

昭和五年十二月二十日印刷
昭和七年四月十一日發行
昭和八年十二月三日版
昭和九年五月十三日版
昭和十一年四月五日版
昭和十一年十二月六日版

著者 河邊貞吉

發行所 西阪保治

大阪天王寺區藤田院二丁目五番地

印刷者 矢張左馬紀

大阪東區鶴橋之町一ノ五八七五

印刷所 日本製本株式會社

大阪東區鶴橋之町一ノ五八七五

安心の秘訣

定價 金拾五錢 (送料四錢)

發行所

大阪天王寺區
悲田院町二八

日曜世界社

電話天王寺九八五番
替大阪壹六七四番

信仰者の身の上話

日本基督教會 齋藤 夫 著 四六判一〇〇頁 定價一圓拾錢送料二錢 【好評重版】

基督教はたゞに學說や思想ではない。「來りて觀よ」の宗教である。人間の生活に活きる福音である。働く者、生ける基督を見んとすれば論より證據、信仰者を見るに如くない。その「事實は小説よりも奇」なる二十有餘人の人々の思慮の記録を、手に入った平易な書き方で物語つたのが本書である。基督者の生活ぶりを見よ。キリストを二千年前の物語としたのではなく、現代に生かして行く信仰者の身の上を讀まれよ。基督の燃ゆるが如き愛が神國建設の途上を急ぐ我日本に、同胞の中に雪の柱、火の柱となつて、活き働きつゝある事實を目前に見ることを得よう。

蓋し傳道用、慰問用として、また、贈答品として、最も意義あるものである。大方の御愛讀を待つ。

發行所 大阪天王寺區悲田院町二八 日曜世界社 電話天王寺九八五番 替大阪壹六七四番

終

